

『論語』の授業のひとつ工夫

— 中学校国語科・漢文教材の発展的学習 —

Another Lesson Plan of “Rongō” in Japanese Junior High School

大橋 敦夫

OHASHI Atsuo

キーワード：漢文・『論語』・発展的学習・日本語の文体・外国語との対照・

方言訳

要旨

中学校国語科・漢文教材の定番の一つである『論語』について、学びを
発展期に深める方策を提案する。具体的には、次の三種である。

- ① 注釈文を中世のものから通時的に読み比べ、日本語の文体の変遷
を見つめる。語句の解釈を深める。
- ② 外国語での読まれ方と比較対照してみる。
- ③ 注釈文の方言訳に挑戦する。

はじめに

中学校国語科・漢文教材のデフォルトとなっている『論語』の授業展開
について、私案を述べることにする。原文の訓読に慣れ、現代語訳によっ
て意味の確認をし、鑑賞をなした後に取り組む発展的な学習方策をいく
つか提言する。

すなわち、①注釈文を中世のものから現代のものまで、通時的に鑑賞
し、日本語の文体の変遷（文体史）を確認する。また、重要語句の理解を
深める。②中国語での注釈のつけられ方を検討し、外国語（あるいは外国）
での読まれ方と比較検討する。③注釈文を地域の方言に訳してみる。

以上の三種により、原文の読みをタテヨコ（通時的・共時的）に深める

工夫である。

一、教科書採択のテキスト『論語』本文)

拙稿(注①)で示した通り、中学校国語科教科書五種は、漢文の文章教材として、いずれも『論語』三〜五篇を採り上げている(注②)。それらの中で、共通に採り上げられているものは、以下の通りである。(全二〇篇のうち、一四篇がダブっている。)

◇三社共通のもの…二篇

子曰「学而時習之」(学而) ……次章以降(一)とする。

↑光村図書・教育出版・三省堂

子曰「学而不思則罔」(為政) ……次章以降(二)とする。

↑光村図書・教育出版・東京書籍

◇二社共通のもの…四篇

子曰「温故而知新」(為政) ↑光村図書・三省堂

子曰「吾十有五而」(為政) ↑学校図書・三省堂

子貢問曰「有一言而」(衛霊公) ↑学校図書・東京書籍

子曰「己所不欲」(顔淵) ↑教育出版・三省堂

本稿では、三社共通の二篇を中心に、私案を展開することとする。

二、注釈の文体史

中世以来の注釈文を通覧することで、近代日本語の変遷の一端をつかむことをめざしたい。過去から現在へと通時的に見ていくのが順当なところだが、「古文」に不慣れた中学生を考慮し、現在から過去へとさかのぼる方式で注釈文を並べてみる。

通時的に対照する文献は、以下の通りである。

■書誌(注③)

〔中世〕抄物

『応永二十七年本 論語抄』中田祝夫編 勉誠社一九七六・六

『京都大学附属図書館清家文庫蔵 論語秘抄』(坂詰力治編『論語抄

の国語学的研究 影印篇』武蔵野書院一九八四・一一

『足利本 論語抄』中田祝夫編 勉誠社一九七二・六

〔近世〕漢籍国字解・漢文大系

『論語示蒙句解』中村惕斎(『漢籍国字解全書』第一卷 早稲田大学

出版部 一九一四・四)

『論語集説』安井息軒(『漢文大系一』第一卷『服部宇之吉評點 富

山房一九〇九・一二／一九九三・五増補版)

〔現代〕新釈漢文大系

『論語』(新釈漢文大系一) 吉田賢抗著 明治書院一九六〇初版 一

九九五・九 改訂三五版

〔教科書・指導書〕

『国語3』中学校国語科用 光村図書 二〇一六・一一

『国語3』中学校国語科用・教師用 光村図書 二〇一六・一一

(一) 子曰「学而時習之、不亦説乎。有朋自遠方来、不亦楽乎。

人不知而不愠、不亦君子乎。」(学而)

◇教科書の注釈

先生がおっしゃるには、機会があるたびに復習して体得する(習熟する)。なんとうれしいことではないか。世の中の人が認めてくれなくても、不平や不満を抱かない。徳の高い、理想的な人格者。

◇指導書の現代語訳

先生がおつしやるには、「先人の教えを機会があるたびに繰り返し学び、しっかりと体得することは、なんとうれしいことではないか。同じ学問の道を究めようとする友が、はるばると訪ねて来てくれることは、なんと楽しいことだろう。もし自分を世の中の人が認めてくれなくても、不平や不満を抱かないのは、真に君子の名に値するのではあるまいか。」と。

◇現代・新釈漢文大系の注釈

孔子言う、学んだことをいつも繰り返し習っていると、いつの間にか理解が深まって自分のものとなり、自由に働きを表すようになる。これはなんと嬉しいことではないか。このように勉強していると、自然に同学同志で遠くから慕ってくるものがあつて、学問について話し合いをする。これはなんと楽しいことではないか。修業と学問は自分の力でできても、人の関係は時のめぐり合わせで、必ずしも自分の思うようにはならぬが、さて、世人が自分の学徳を認めてくれなくても、不平不満を抱かない人は、なんと徳の高い、りっぱな人ではないか。

◇近世・漢籍国字解の注釈

子とは、孔子をさす、子はもと男子をたつとびてよぶ詞、古は師を称して子といへり、若シ孔子曾子と、姓をかうふりて云時は、亦他の師にも通ずる故に、まさしくわが師を称して、只子とばかり云なり、曰とは、口をひらきて、詞を出す義なり、孔家のともがら、孔子の語をしるす故に、子曰と云なり、

学は論語の開巻第一義なれば、よく其意を得べきなり、学の字をまなぶとよむは、まねぶなり、知ると能することを兼て云、凡そわがいまだ知らず、能せざることを我より先に、これを知り、これを能する人の、其得たりつるわざを、まねびとりて、わが身にこれを知り得、能し得ることを云、いづれの業をまなぶも、皆かくの如くなりといへども、ここに云学は、儒

者の学なり、かの詩賦をよく作るを、詞章の学と云、経書にひろくわたるを、記誦の学と云、二つは俗儒なり、皆儒業の兼る所といへども、君子のむねとする所は、道を学び、徳を成して、常人より聖人に至るの学なり、蓋し人は万物の長なれば、己を成し物を成す、天職の任をもき故に、天下の道理を知り、天下の事務を能せではあるべからず、少しも名のため、利のために学ぶにはあらず、よく其道をきはめて、其任をつくせるは聖人なり、聖人の特性、たれよりも天よりうけそなへたる故に、人学ぶ時は、学び得るなり、すでに学ぶと云よりは、必聖人を目あてにして、其徳性を成し、天性本来の初にかへるべし、君子の学ぶ所、大むねかくの如し、而とは、上をうけて、下ををこすの詞、時とは、しばしばして、やまざる義なり、習はすとは、ならすなり、其まなぶ所を、時々くりかへしくりかへして、わが身になれそますことを云、之とは、学ぶ所の業をさす、それ学びざれば、習はすべき事なし、学んで習はざれば、学ぶ所を得べき道なし、習へどもよりよせざれば、その習はす所熟せずして、亦ついに得ることあたはず、この故に、学んでは、又必よりよりに、これを習はすべし、然れば時習は学をするの本なり、此一句五字、聖人の詞、きはめて周密なることを見るべし、

説は、悦と同じ、悦ぶとは、うれしき意なり、学んでよりこれを知り、悦はす時は、いつとなく其意味を会得して、いまだ知らざることを知り、いまだ能せざることを能する故に、をのづから、うれしき意出来るなり、亦とは、餘の事のこれに類したるより、うつりて云詞なり、是も亦悦ばしくはあらざらんやと、疑ふに似て、必定うれしかるべき道理ぞとなり、この悦びは、其学ぶ所を得て、道に入り徳にすすむの始なり、

朋は同類なり、我とをもむき同じ者を云、遠方より来ると云時は、近き者は云に及ばず、楽むとは、悦ぶ意内にあまりて、外にあらはるるを云、

悦美のふかきなり、それ天地は、萬物を生育するを以て、其徳とす、人その生物の徳をよけ生れ、これを心にそなへて、仁性とす、この故に、人心本然の徳、人を愛し、物を利することを、好まずと云うことなし、況や人は萬物の靈なれば、天地の生育及ばざる所を、裁成輔相して、成したつる職任、のがれがたし、己を成し、物を成すも、皆この職分の内にして、本末の次第、まづ己が徳を成すべし、今我すでに得る所の善ありて、則これを人に及ぼし、しかも信じて従ふ者多き時は、わが本心の願ひにかなひ、又天職をつとむる効あり、其悦ぶ所ふかくして、樂みあるに至らざらんや、下の句義上の段に同じ、

愠るとは、心平かならずして、ふづくむ義なり、怒る意の、内にふくみたるを云、君子とは、其徳すでに成りたる人の称なり、それ学すでに己を成すに至れるは、もし時にあはず、勢にさへられて、信従する者なけれども、みづからかへりみて、実に善なり、人の知る知らざるは己にをいて、かくることなきによりて、少しも天をうらみ、人をとがむるの意なし、なんのいきどほることあらんや、蓋し其徳人に及んで、樂しむに至る時は、まことに成徳の人なり、されども、これは順境界なれば、君子の美、いまださだかならず、只人に知らるべき実ありて、知られざる、逆境界に居れども、さらにいきどほることなきを以て、真実の君子たること、明にするるなり、この故ここにをいて、不亦君子乎と云、此句義も亦上に同じ、かの君子の徳の成る故も、亦他法あるにあらず、只その学ぶ道の正しく、習すわざの熟して、悦ぶ意ふかくなる、其功をやめず、これを積こと久きにあるのみなり、

◇近世…漢文大系の注釈

学問ヲシテ道德ヲ行フノ工夫ヲナシ、時々之ヲ習ヒ見ルト、又学進ミ道熟シ来ルニ従テ、同門ノモノモ来リテ、互ニ相談シ相論ズルトハ、実ニ悦

バシク又樂シキコトナラズヤ、又到底世ヲ救ヒ道ヲ樹ツル能ハザルヲ知リ、隠遁ノ身トナリ、世人ヨリ其存在ヲ認メラレザルモ、聊カモ怨ムルコトナキハ是レ亦徳ノ人ト云フベキモノニ非ズヤ

◇中世…抄物の注釈(後の考察の際に、ポイントとなる部分のみ掲げる)

○足利本

子ハ師也 孔子ヲハ万人ノ師ト仰カンナリノ只 子トハカリ一字ヲイテモ孔子ト心得ソノ此子曰ニ字ヲ 全部ニカケテ見ソ

○清家文庫蔵本

子ハ孔子ヲ云ソ 古ニ有徳ノ者ヲ子ト称シタソ 師ヲ称シテ子ト為スト云テ 人ノ師匠タル者ヲ子ト云タソ

○応永二十七年本

子トハ孔子ヲサス也 子トハ有徳ノ称也 古ニ師匠ヲ称シテ謂師也

(二)子曰「学而不思則罔。思而不学則殆。」(為政)

◇教科書の注釈

よく考えて研究しないと、物事の道理を明確につかむことができない。理解があやふやになる。自分の考えだけに頼って、広く先人の意見や知識に学ばないと、(独断に陥って) 危険である。

◇指導書の現代語訳

先生がおっしゃるには、「ものを読んだり教わったりするだけで自分でよく考えて研究しないと、物事の道理をつかむことができない。自分の考えだけに頼って、広く先人の意見や知識に学ばないと独断に陥って危険である。」と。

◇現代…新釈漢文大系の注釈

孔子言う、博く学ぶだけで、自分の心で思いめぐらしてよく考え、よくそ

の理をもとめてみないと、学んだことがぼんやりしていて、その道理をつかむことはできない。之に反して、自分の乏しい知識で思いめぐらすだけで、博く他人の言や古人の教えを学ぶことをしないと、考え方が狭く、一方に偏って、危険この上もないものだ。

◇近世…漢籍国字解の注釈

学は、知行をかねて云、思ふとは、其理を心に求るなり、学ぶ所を思ひみざれば、其心くらくして、ついに得ることなし、

此学は、其事を身に習はずを云、其理を思へども、又其事をならはざれば、あやうくして、たしかならず、一説に、此学も亦知行をかねて見るべし、凡そ経をよみ、史を考て、其思ふ所を證驗すること、其内にありと、

◇近世…漢文大系の注釈

古人ノ道徳ヲ学ビテ、其意義ヲ考ヘ解スルコトナクバ、聖人ノ道ヲ誣フル者ト謂フベシ、常ニ考ヘ思フ所アリトモ、古人ノ書ニ就テ学バザレバ、一旦事アルニ際シテ疑心ヲ懷キテ信ズル所ナキ故ニ、断然タル行ニ出ツル能ハザルナリ。

◇中世…抄物の注釈

○足利本

学フバカリテ 義理ヲ思案セネハ□□然トシテ 人カ問ヘドモ不知ソ

○清家文庫蔵本

此章ニハ学ノ法ヲ教タソ 言ハ学テハ必ス其義理ヲ思フソ

○応永二十七年本

学問シテハ委ク其義理ヲ思惟スヘシ 義理ヲ工夫スレハ不審カ多クテクルソ

抄物は、講義をふまえて成立したものを主とするので、文末表現を軸と

して、語彙や語法に口語的特徴を示すものを含む。例示した部分だけでは、その要素が少ない。まずは、平安朝の古文とは趣を異にする文体であることを、感得することを目標としたい。

語句については、『論語』全編を通じてのキーワードである「君子」についての理解を深めるヒントが占められたと言えよう。

加地（二〇二二）は、「君子」を「知と徳の人」（「小人」を「知だけの人」とするが、抄物まで注釈をさかのぼることで、その見解が伝統的なものであることがわかる。

三、外国語での読まれ方

漢字、そして『論語』のふるさと、本家中国での現在の注釈文を検討してみる。

中国国内における『論語』ならびに関連書籍は、当然ながら汗牛充棟というにふさわしい状況である。注釈書もあまたあるが、現在、比較的手しやすい（ということ）は、多くの人の目に触れる書の一つから、永和監制『論語』（河北教育音像出版社 二〇〇七・七）を選んで比較する。

（二）子曰「学而時習之、不亦説乎。有朋自遠方来、不亦楽乎。

人不知而不愠、不亦君子乎。」（学而）

□訳文（簡体字を日本漢字に改め、句読点を付した。）

孔子説…「学了又能時常溫習它、不也是很愉快的事嗎？有志同道合的人从遠方來相會、不也是件令人高興的事嗎？別人不了解我、我并不惱恨、不也是——个有修養的君子嗎？」

□日本語訳

孔子は説いた。「学んで、その内容を常に自分なりにふり返る。これは

愉快なことではないだろうか？自分と思いの通じる友が遠くから会いに来てくれる。これはとても気持ちが高揚することではないだろうか？他人が自分のことを理解してくれなくても悩んだりしない。これは修養を積んだ君子の態度ではないだろうか？」

(二) 子曰「学而不思則罔。思而不学則殆。」(為政)

□訳文

孔子説「只学習而不思考、就会无所收获。只思考而不学习、就会停滞不前。」

□日本語訳

孔子は説いた。「勉強を重ねるだけで、自分で考えることをしない。これでは、得るところはない。自分なりに考えるだけで、勉強をしない。これでは、前に進むことはなく停滞あるのみである。」

(一) (二)とも、日本の中学生が学んでいる内容と大差はないが、言葉がより現代的な表現になっていることが実感できる。

さらに、本家中国以上に儒教文化が定着している韓国での注釈文の検討へと進めたい。また、英語訳の検討(注④)も興味あるところだが、そこまでは発展が過ぎるきらいがある。中学校段階では、構想のみに留めておくべきだろう。

今回の比較対照は、限られた分量だが、『論語』を主に経書の社会的受容を比べると、儒教の浸透度、それぞれの社会の内在的論理の比較分析にまで観点を広げていくことが考えられる。その際には、ベトナムも対象に加えるとともに興味が増す。しかし、ここまで手を広げるのは、高校以上というのが現実的である。

なお、それぞれの言語の日本語訳に際しては、対象の言語を母語とする留学生(大学あるいは高校)や、地域の国際交流員など、校外とのつながりを求めたい(注⑤)。交流活動を通して、漢文テキスト以外にも学びの幅が広がる刺激を得られるであろう。

四、方言訳

本文の理解をさらに深める方策として、注釈文を地域の方言に翻訳することを実践してみたい。全国的に親しまれている関西弁による訳例を参考に、それぞれの地域の方言訳に挑む試みである。中学生個人の手に余る課題になるので、地域の方言話者のアドバイザー、家族の協力等が前提になる。協力を仰ぐにあたっての交渉の段取り、取材場面での異世代交流等、総合学習の観点で進めたい。

次に(一)の訳例を掲げる。

◇関西弁訳

(孔子) 先生は言わはった。「なんやあつた時に、『せやせやこんなん先生言うてはったなあ』言うて、思い出すんや。そんなん素敵やん！仲のええ友達がわざわざ遠くから来てくれて、話しでける。めっちゃめっちゃ嬉しいやん！人間なんぼ頑張ったかて、褒めてくれへんこともある。せやけど腹立てへん。そんな人間がようでけた人間(君子)なんやで。」

(八田真太『関西弁超訳 論語』アールズ出版(二〇二一・一一)

続いて、長野県内の例を挙げてみる。

◇飯田弁

先生はおっしゃんたんだに。「なんかあつた時になあ、『そっだ、こん

なこと先生はおっしゃってたなあ』って言つてなあ、思い出すな。それから素敵なことだに。仲良しの友達がわざわざ遠くから来てくれるもんで、話ができるんな。とつてもうれしに！人間どんなに頑張つても、ほめてもらえんこともある。でも、ごうをわかさんのな。そんな人がよくてきた人間なんだに」

敬語表現の在り方、文末表現、あるいは俚言などに、地域の特徴を見出すことになる。

おわりに——今後の課題——

今回の方策は、漢詩の教材にも適用できる。特に注釈文の通時的読み比べは、より際立った特徴のある資料も提示できる。杜甫「絶句」(光村図書のみ採択)を例にとれば次のごとくである。

絶句 杜甫

江碧鳥逾白

山青花欲然

今春看又過

何日是帰年

◇近世…唐詩選国字解の注釈(注⑥)

前に題があつて、歌行か律詩があつて、その次に「絶句」と置いたを、すぐに「こへだしたものだ」。

川の水の湛へた処に白鳥が浮かんでいるが、水碧なるゆへ、鳥がいよいよ白く見ゆる。山が青いゆへ、花の紅が火の燃ゆるやうに見ゆる。春の盛りをいふ。

◇近代…杜詩講義の注釈

是は眼に見た処を其儘に述べてさうして最後に感慨に這入つて居ります。前の二句は、眼で見た処の景色で此中には感慨が無いのであります。然るに下の二句は此春を見、此景色を見て、空しく此春を過したといふ処から感慨が起つて、毎年々々同じ景色を見て居るので、今年も此処に暮して何時真に我が故郷に帰ることになるであらうかと云ふ感慨に這入つたのであります。此感慨に這入ります処に無限の妙が有ると言つて宜しい。

それで、是で意が尽きて何の面白みも無いと言へばそれまでであります。が、絶句と申しますものは総てさう云ふ心持のものであります。沈徳潜の選びました絶句は比較的に所謂正声なるものに近いといふことは不信の味がありますものを採りましたのであります。今春看又過、何日是帰年などは大分意の深い処があると言つて宜いのでございませう。

この資料は、語り口調が特色で、四社共通(光村図書以外採択)の教材である「春望」を例にとれば次のごとくである。

春望 杜甫

国破山河在

感時花濺淚

烽火連三月

白頭搔更短

城春草木深

恨別鳥驚心

家書抵萬金

渾欲不勝簪

◇近代…杜詩講義の注釈

此の春望の詩は是はまあ非常に有名なるものでございまして、杜詩の例を挙げて申します場合には第一に指を屈せられます詩でございませう。尤も之を重にも唱道致しましたのは歐陽永叔の六一詩話、又続いて司馬温公の統詩話、此様な人が当時の事を申します場合に必ず之を引きまして、杜詩の及ぶべからざる事は全く此処にあるのであると、当時の人に

分り易い様に詩話に致して書いてありますから、そこで之を読みました人が欧陽脩とか司馬光とかいふ何れも名高い人であるに依つて、後の者は皆兩人の揚げられたあとを慕て参りまして、必ず此杜詩を論ずる場合には此詩を引くといふ様になりました一層署名になりました次第であります。(以下略)

中世に端を発する「中立的な口語文体」である抄物の文体を彷彿とさせる語り口である。こちらも、つぶさに読み込んでいけば、語句の理解を深めることが期待できる資料の一つである。(実際の資料提示の際には、現代仮名遣いへの変更、漢字の仮名表記化(是・之・此・依など)等、読みやすくする必要がある。)

注

- ① 拙稿「中学校国語科教科書・漢文教材のデフォルト」(『所報 學海』第七号 上田女子短期大学総合文化研究所 二〇二一・三) 調査対象の五社は、光村図書・学校図書・教育出版・東京書籍・三省堂である。
- ② 現行版(令和二年二月検定済)の一つ前の版(平成二十七年三月検定済)による。ちなみに、現場での採択率の高い光村図書の場合、旧版と新版とで、『論語』・漢詩とも、教材の差し替えはない。
- ③ 注釈文を引用する文献について、略述する。

近代日本語の出発点である中世に成立した抄物資料は、中立的な口語文体の源流と考えられる。すなわち、

抄物↓江戸講義物↓明治講義物↓演説↓全国共通語
のような系譜が想定できる。この系譜に所属する資料を通覧することをもくろみ、選出したのが今回の資料である。

中世の抄物からは、『論語抄』三種

応永二十七年本(一四二〇)

清家文庫蔵本(一五二八)

足利本(一五六〇)

近世期成立の講義物から二種

『論語示蒙句解』(二七〇二) 中村惕齋講述

『論語集説』(二八七二) 安井息軒

これらの資料の注釈文の文体・語彙によって、口語文体の息遣いを掴むこととしたい。

- ④ 『新版 中日英対訳三方国語「論語」孔健編訳代表 三冬社 二〇一八・一〇

⑤ クラスや校内には、対象の言語を母語とする生徒がいるかもしれないが、本人が望まない場合、無理強いは禁物である。

⑥ 引用に用いた書誌は次のものである。

『唐詩選国字解3』(平凡社・東洋文庫四〇七 一九八二・三)

↑底本・服部南郭弁・林元圭録 寛政三(一八〇二)年六月再版

『杜詩講義1・2』(平凡社・東洋文庫五六四・五六五 一九九三・

五・六)

↑底本・森槐南著『杜詩講義』上・中 文芸堂 第二版

明治四五(一九二二)年三月・五月

【参考文献】

◆論文

- 周 福紅「中日国語教科書に掲載されている漢文についての比較研究
——中学校における『論語』の言葉——」『愛知教育大学大学院国語研究』
一三三 一〇一五・三二
- 安藤信廣・坂口三樹「漢文教育の位置と方向」『日本語学』三六―七 明
治書院 二〇一七・七

◆書籍

- 谷沢永一・渡部昇一『人生は論語に窮まる』PHP研究所一九九七・三
- 加地伸行『論語入門 心の安らぎに』幻冬舎二〇二二・六